モノグラフ
中学生の世界
vol. 31

中学生の金銭感覚

目次

特集●豊かさの中での成長のとらえ方……深谷昌志……2

調査レポート●中学生の金銭感覚……深谷昌志……9

本報告書の要約……10

第Ⅰ章 金銭とのかかわり

1．こづかいの額……11
2．貯金の額……17
3．カードや通信販売……20

第Ⅱ章 金銭感覚をめぐって

1．アルバイトの体験……23
2．アルバイトの時給……26
3．お金の貸し借り……28
4．お金の重み……30

第Ⅲ章 経済生活の見通し

1．1か月の生活費……33
2．収入の見通し……36
3．将来の見通し……38
4．お金のしつけ……40

まとめに代えて……44

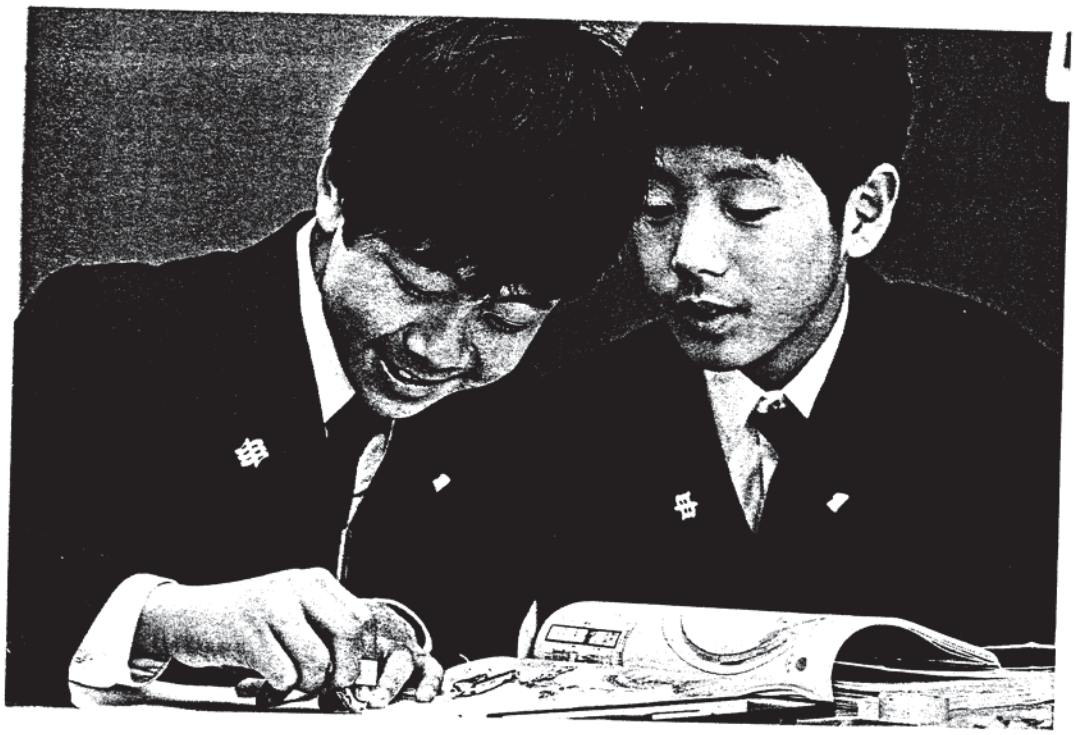
資料1　調査票見本……45
資料2　学年・性別集計表……59

※おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。

特集

豊かさの中での成長のとらえ方

放送大学教授
深谷昌志



金銭にかこまれた生活

豊かな社会が到来したといわれる。土地代や家賃の値上がりが目につくので庶民の生活感覚からすると、それほど豊かとは思えない。しかし、それでも不足感を持たないですむから、貧しくないという意味での豊かさなのかもしれない。

そこで問題となるのは、そうした豊かさが子どもの人間形成にどのような影響をもたらすかであろう。人気のあるテレビゲームのソフトが発売されると、何千円もするのに子ど

もたちの列ができる。あるいは、コマーシャルでヒットしたスナックを買う。この場合は、1日だけならたいした額でないが、毎日1個ずつが10日近く続くと、これも無視できなくなる。

そこで、あらためて子どもたちが金銭にどの程度とりかこまれているのか、その実態を正確にとらえることが必要となる。東京近郊の小学4～6年生を対象として、子どもたちの金銭感覚について調査したことがある。その結果によると、1か月のこづかい額は**図1**の通りである。

平均して1,000円前後で、思ったより高額でないように見える。しかし子どもたちは、文房具やおやつ、マンガ雑誌を求めるときに、こづかい以外に金銭をもらう場合が多い。したがって子どもたちのふところを通りすぎる現金は、こづかいの何倍かになろう。

それに加え正月が来ると、子どもたちはお年玉をもらう。その額は**図2**のように、20,000円に達する。もちろん、子どもたちがそうした大金をつかいきることはないから、そのうちのかなりは貯金にまわる。しかもお年玉は毎年もらうから、貯金額は少しずつ増加していく。その結果、子どもの貯金額は**表1**のように、12万円を超える。もちろんこれは、あくまで平均値なので、子どもたちの中には貯金が50万円を超える子も1割近くを占める。

さらに、自分用として子ども部屋に持っている物を**図3**にまとめてみた。本棚やロッカー、百科事典など、リストアップしてみると、あるのが当然のように思うが、それでもこうしたデータを重ね合わせていくと、あらためて子どもたちが物質的な豊かさの中で生活しているのがわかる。

金銭の重み

そうした形で豊かさの中で成長していくのはよいが、そうすると子どもたちの金銭感覚がまひするのではないか。

図1　1か月のこづかい

――1000円前後――

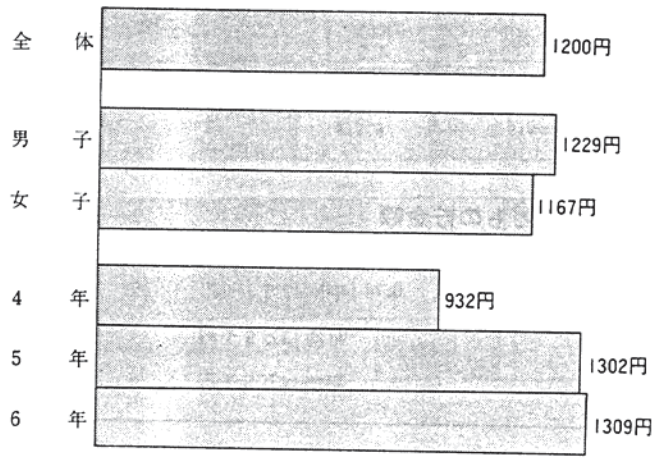


図4は草むしりや窓ふきをしたときに、ごほうびをどれくらいほしいかを尋ねた結果を示している。子どもたちは時給300円くらいほしいという。大学生の時給が500～700円であることを考えると、300円という反応は子どもなりの良識を働かせた結果といえなくもない。

そして図5に、子どもたちの金銭感覚を、お金が道に落ちていたらそのままにしておくか、それとも拾うかの形で尋ねた結果を示した。5円玉だとそのままにしておくが、50円玉や100円玉は拾って自分のものにする。そして、500円から警察に届けるという。500円からが大金になるのであろうか。

このように、子どもたちは物質的な豊かさの中で成長してくるので、金銭の値打ちをとらえにくくなり、金銭があるのをあたり前と思う感覚を抱き始める。そして図6のように、自分たちが大きくなったとき、大きな家に住むのは無理としても、クーラーがあり、自動車を持っている生活、つまり親と同じ程度の生活を送れるだろうと思っている。

図2　お年玉の額

――平均19882円のお年玉――

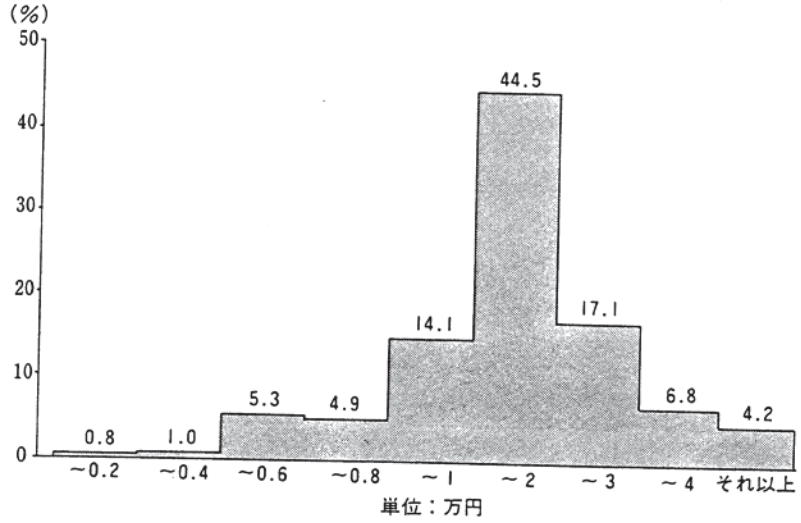


表1　子どもの貯金額

4	年	平均12万7千円
5	年	平均13万9千円
6	年	平均14万5千円

図3　自分用として持っている物

——勉強机を持っている子は94%——

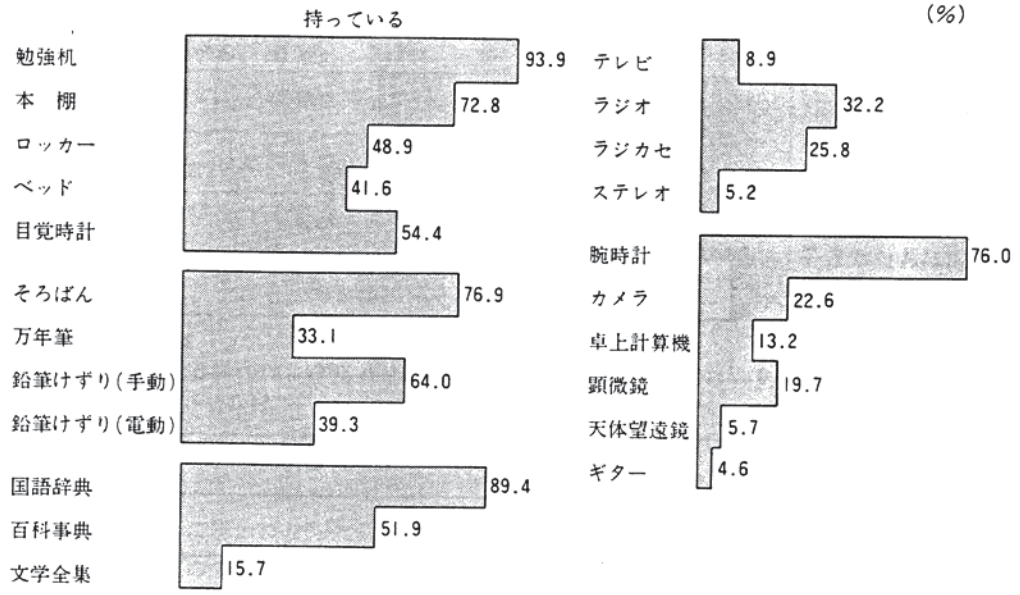


図4　窓ふきや草むしり(1時間)のごほうびの金額

——300円くらい——

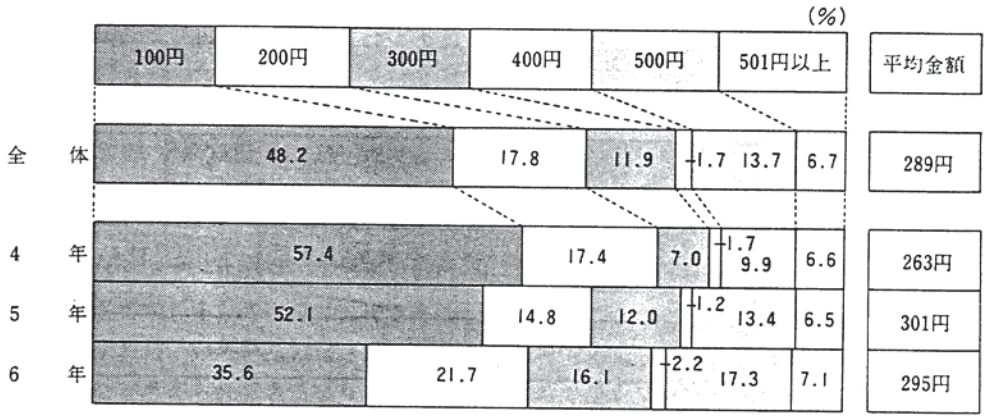


図5　お金が道に落ちていたらどうするか
——500円から大金——

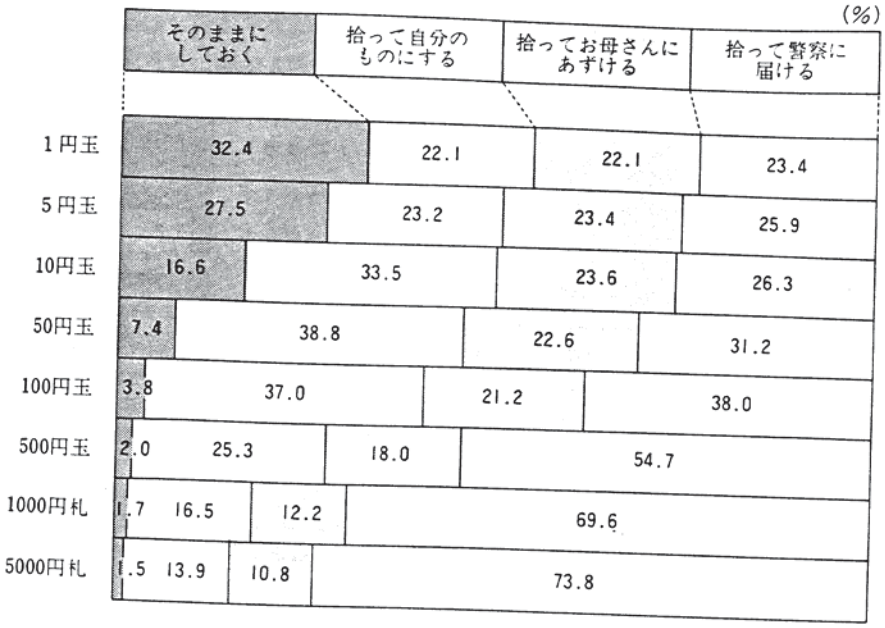
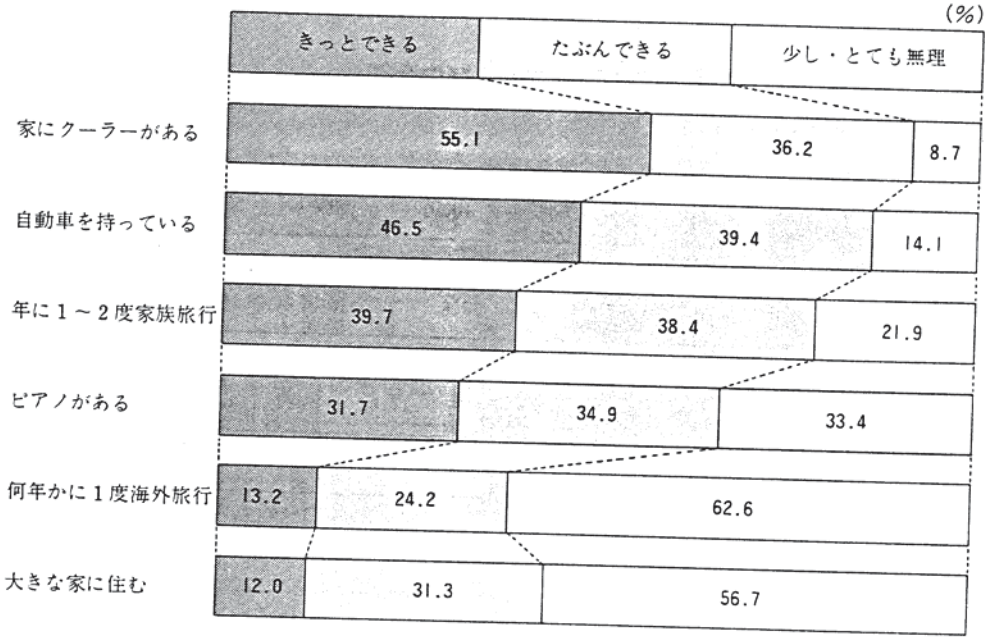


図6　おとなになったらどんな生活を送れそうか
——まずまずの暮らしを送れそう——



子どもも働いていた

アジアの多くの国々に出かけると、現在でも働く子どもの姿に接する。NIES とよばれる韓国やシンガポールなどは別として、その他の国々では、小学校もモーニング、アフタヌーン、ナイトの三部制をとっていることが多く、そのナイトの学校へ就学できない子もまれではない。そして、行商をしたり、農作業を手伝ったりして、子どもたちが働いている。

そうした子どもを見るにつけ、少なくとも子ども時代は働かなくてすむ社会を築きたいと思う。子どもを貧しさから解放したいのである。

と言うときれいごとに思われがちだが、日本にしたところでほんの少し前まで、子どもたちが働いていたのは歴史の示す通りである。

農商務省の編集した『職工事情』は、明治30年代の日本の労働事情を正確に伝える資料集として知られているが、その中に幼年工として、10歳前後の子が働いていた記録が残されている。そうした資料はその他にもさまざまな形で認められるが、無着成恭氏の優れた実践記録『山びこ学校』の中にも、子どもたちが貧しさに直面しつつ、たくましく生き抜こうとしている姿が描かれている。

江口江一君の「母の死とその後」は文部大臣賞をもらった作文だが、その一節を引用しておこう。

「僕の家は貧乏で、山元村の中でもいちばんぐらい貧乏です。そして明日はお母さんの三十五日ですから、いろいろお母さんのことや家のことなど考えられてきてなりません」

父の死後、母も亡くなり、一家離散のときを迎える。あんなにまじめに働いていたのに、どうしてわが家の暮らしが苦しいのか。そうしたことから、村の貧しさがどうして生じるのか、その背景を考えていこうとする。

江口君の作文は村の生活をリアルにとらえようとしている点に優れているが、この作文に限らず、『山びこ学校』には働く子どもたちの姿が描かれている。そして、この作文の舞台となったのは山形県の山元村で、昭和25年前後である。その頃でも子どもたちは働いており、都市部では新聞配達や納豆売りなどをして家計を助けている子は少なくなかったのは、史実の示す通りである。

そう考えてくると、日本の子どもたちが貧しさから解放されたことを高く評価したいと思うが、その結果、金銭のありがたみがわからないという新しい問題が生じている。

経済的社会化という考え方

金銭に象徴されるような経済についての感覚をいかに身につけていくのかを経済的社会化(economical socialization)という。そして、お金のある暮らしをあたり前に思い、金銭の値打ちがわからないのが、日本の子どもたちの経済的な社会化を特徴づけているものなのであろう。

なにしろ子どもたちは、1円も自分の手でかせいだことがないのに、こづかいやお年玉の形で金銭を手にしている。そして、テレビゲームのソフトやマンガ雑誌などを購入する。つまり、労働に従事して賃金を得ることなしに、完全な消費者として成長してくる。したがって1,000円の値打ちは自分で働いたときの何時間分の労働に相当するとして判断するのでなく、マンガ雑誌何冊分というように、物をどの程度求められるかという基準として意味を持つことになる。

アメリカのワシントン州で小学高学年生に調査を実施する機会があった。その中で、「賃金をもらった」(原文では get a job) 経験を尋ねてみた。**表2**のように3分の1の子が「働いたことがある」と答えており、時給は1ドル強だという。

たしかにアメリカでは、芝刈りやペンキ塗りなどをして現金を手にしている子どもを見かけるし、中学生ともなると、ベビーシッターやお店の売り子、ガソリンスタンドのサービス係などの形で、仕事をしている子は少なくない。

アメリカの大学生は、富裕な家庭の子どもでも、自分の手で学費をかせぐ。だから6月に入ると、キャンパスがからっぽになる。そして、9月になると、彼らはかせいだ金をふところに、新学期を迎えるためにキャンパスに戻ってくる。しかし日本の大学生は、親からの仕送りをあてにし、アルバイトで得た収入は生活費でなしに、レジャー資金となることが多い。

日米の学生の金銭感覚の違いも、経済的な社会化の観点からすると、背景を理解できるように思う。いずれにせよ、豊かな社会が到来し、金銭の大事さのわかりにくい時代だけに、子どもたちに金銭の大事さをどう教えたらよいかが、新しい課題となりつつある。その際にはアメリカのように、貧しさとは別の問題として、子どもたちに金銭的な自立を促すために労働を体験させることも必要となってこよう。

学校でも、学業成績が一定水準以上の者、そして部活動に参加している者などの条件をつけ、雇い主と十分に話し合いを持った上で、夏や冬の休みに子どもたちの就労を認めることも必要なのかもしれない。いずれにせよ、金銭観の問題は、子どもの教育を考えるにあたっての新しい課題を提起している。しかもこれからの社会で金銭抜きの生活が考えられず、それに加えキャッシュレスのような複雑な条件が重なる。さらに、倹約を美徳という考え方も有効性を失いつつある。それだけに金銭とのつき合い方をいかに教育していくのかは、新しくてむずかしいが、しかしチャレンジしがいのある教育課題のように思われてならない。

表2　アメリカの子どもたち

働いた体験（小5）	ない	64%
	ある	36%
→	月収	26ドル
	労働時間	月17時間

調査レポート

中学生の金銭感覚

放送大学教授

深谷昌志

〔調査概要〕

対象●北海道・東京都の公立中学校6校の
　　1～3年生 2,465名

期間●昭和63年6月～7月

方法●学校通しによる質問紙調査

サンプル構成　（人）

学年＼性別	男子	女子	計
中1	302	280	582
中2	568	545	1,113
中3	400	370	770
計	1,270	1,195	2,465

本報告書の要約

① こづかいの額

中１が1,525円、中2が2,315円、中３が2,852円と、学年が上がるにつれてこづかいの額がふえる。（P.13表３）

② ほしい額

子どもたちは今より、あと1,000～1,600円くらい多くこづかいをもらいたいと思っている。（P.16図２）

③ 貯金の額

中学生たちは平均して61,000円（中１）から88,000円（中３）を貯金している。小学生の貯金額が10万円を超えたのと比べて、中学生の貯金は少ない。（P.19図３）

④ カードを持つ割合

カードを持っている割合は43％で、中学生たちもキャッシュレスの渦に巻きこまれている。（P.21表14）

⑤ 通信販売

通信販売をよく利用している子どもは2.6％で、ごく少数にとどまっている。（P.22表16）

⑥ アルバイトの体験

中１の11％、中２の13％、中３の17％がアルバイトを体験している。（P.25図５）

⑦ アルバイトの時給

アルバイトに出れば500円くらいの時給がもらえると思うが、700円くらいもらえるとうれしい。（P.27図６）

⑧ お金の意味

道にお金が落ちていたら、10円なら拾う。そして1,000円だと迷うが、5,000円以上は警察に届ける。（P.30表22）

⑨ 大金とは

子どもたちによると、大金という感じがするのは10,000円からである。（P.32表23）

⑩ 家庭の生活費

中学生たちは、わが家の生活費は平均して25万円くらいだと思っている。（P.35表27）

⑪ 収入の見通し

25歳くらいになったとき、ふつうくらいにいったら23万円の収入は手にできるだろう。そしてうまくいったら、31万円がほしい。（P.36表28）

⑫ 将来の見通し

広い庭のついた家は無理かもしれないが、クーラーのついた家に住み、自動車を持った暮らしはできるだろうという。（P.38図９）

全体として

中学生たちは金銭的に豊かとまではいえないものの、不足感の少ない生活を送っている。そして、それなりに金銭の大事さを理解しているように思われる。しかし、働いて金銭を得た体験がないだけに、金銭の持つ重みを理解していない印象を受ける。データに目を通しながら、豊かな社会の現状をふまえて、子どもたちに金銭面での教育を行う必要性を感じた。

第Ⅰ章 金銭とのかかわり

1．こづかいの額

調査に協力してくれた生徒たちのプロフィールを表1～2に示した。半分近くの子が熱心に部活動に参加しており、そして短大を含めると、8割の者が高校卒業後も進学を望んでいる。

ごく標準的な生徒の姿だが、以下、金銭面でのデータを紹介してみよう(表3、図1)。まずこづかいの額は、中1の1,525円が中2で2,315円となり、中3では2,852円となる。3,000円近くの額になるから多いような感じもするが、部活動などで友だちづき合いも増すことを考えると、妥当な金額なのかもしれない。

なお、こづかいのもらい方は表4の通りで、「1か月分まとめてもらう」者が77%と、4分の3を超える。小学生などでは、週、または10日に1度の形も認められるが、中学生ともなれば、月1回の月給制が子どもたちの感覚に合っていよう。もっともそうしたこづかいのもらい方は、中学生になってからというより小学生の頃から行われていた家庭が多い(表5)という。そして表6によると、こづかいは母親からもらう子が7割を占める。

欧米では男性が財布を握っていて、必要な額を週単位で妻に渡す家庭が少なくないといわれる。しかし日本ではなぜか、妻に家計の全権を託す男性が多く、そうした事情を反映してか表6のように、中学生についても母親

がこづかいを渡すのであろう。

いずれにせよ、子どもたちは月に1回2,000～3,000円のこづかいを手にしている。3,000円といえば日に100円見当になるので、子どもとしてはもう少しこづかいを多くと思っていよう。そしてたしかに4割の子はこづかいが「少し足りない」と感じており、これに「ぜんぜん足りない」の16%を含めると、54%と過半数を超える子が、こづかいが足りないと感じている。もっとも「ちょうどいい」が35%を占めるので、中学生たちはまだそれほど物を買う生活に巻きこまれておらず、それだけにこづかいの不足を痛感しているわけではないように思う(**表7**)。

ちなみに、子どもたちにこづかいをいくらもらいたいかを尋ねると、**表8**のように4,000円程度を望んでいるのがわかる。おおづかみにして、現在もらっているこづかいの額よりもあと1,000円か1,600円くらい多くもらいたいというのが、子どもたちの平均的な願いとなる(**図2**)。

(表1) 部 活 動

(%)

	学年			全体
	中1	中2	中3	
入ったことがない、または今は入っていない	14.8	24.6	34.8	25.3
運動部に入り、積極的に参加している	58.0	44.8	36.3	45.3
運動部に入っているが、どちらかといえばサボりぎみ	13.8	18.1	17.8	17.1
文化部に入り、積極的に参加している	11.3	7.5	7.6	8.5
文化部に入っているが、どちらかといえばサボりぎみ	2.1	5.0	3.5	3.8

(表2) 進 路

(%)

	学年			全体
	中1	中2	中3	
中学または高校までで就職したい	21.8	24.0	27.5	24.6
短期大学や専門学校まで行くつもり	28.2	33.3	30.4	31.1
まあまあの4年制大学へ行くつもり	34.9	32.2	31.5	32.7
むずかしい4年制大学へ行くつもり	15.1	10.5	10.6	11.6

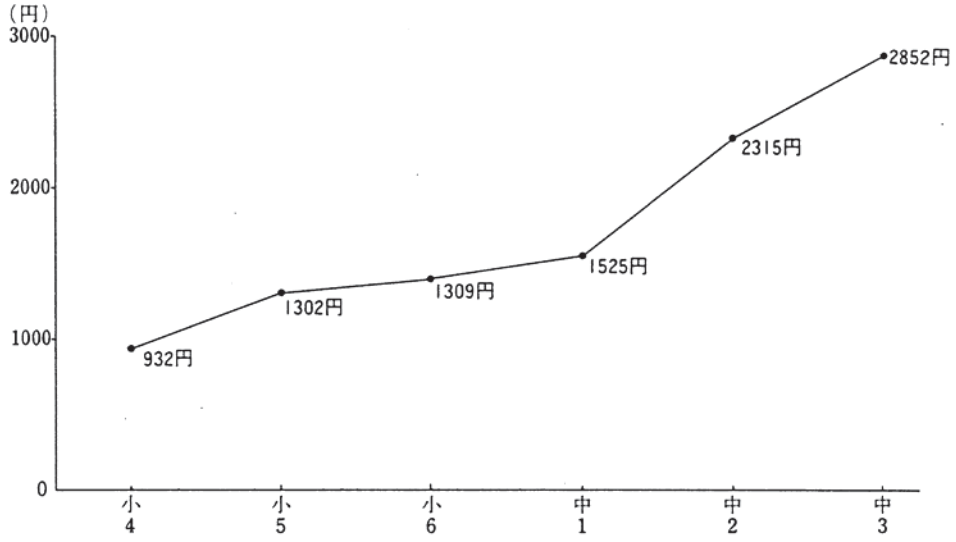
（表３）こづかいの額

→平均2200円

（%）

		～999円	1000～1499円	1500～1999円	2000～2499円	2500～2999円	3000～3999円	4000円～	平　均
学　年	中　1	8.6	35.0	13.7	16.2	21.8	2.0	2.7	1525円
	中　2	4.2	13.7	17.3	25.1	28.3	4.3	7.1	2315円
	中　3	2.0	7.1	7.2	22.3	37.7	7.9	15.8	2852円
性	男　子	5.4	16.7	12.9	19.6	29.6	6.5	9.3	2185円
	女　子	3.7	16.7	13.7	25.0	29.8	3.0	8.1	2313円
全　体		4.6	16.7	13.3	22.2	29.6	4.9	8.7	2247円

（図１）こづかいの額×学年



（表４）こづかいのもらい方

└──→１か月分をまとめて

(%)

	学年			性		全体
	中 1	中 2	中 3	男子	女子	
１か月分ずつまとめてもらう	76.4	77.5	76.9	75.8	78.3	77.0
10日か半月に１度まとめてもらう	3.3	2.2	2.9	3.5	1.8	2.7
１週間分ずつまとめてもらう	3.5	3.3	2.5	3.5	2.7	3.1
毎日、その日の分をもらう	1.9	1.6	0.8	1.8	0.9	1.4
ほしいとき、家の人に言ってからもらうので、決まっていない	11.8	13.4	15.7	13.1	14.6	13.8
もらっていない	3.1	2.0	1.2	2.3	1.7	2.0

（表５）いつから今の形か

└──→小学生の頃から

(%)

	性		全体
	男子	女子	
小学１～２年生のときから	15.1	16.6	15.8
小学３～４年生のときから	20.7	24.8	22.7
小学５年生のときから	16.2	18.8	17.5
小学６年生のときから	14.5	14.8	14.7
中学生になってから	33.5	25.0	29.3

（表６）誰からもらうか

└→母親からが７割

（%）

	性		全体
	男子	女子	
お父さん	9.3	10.4	9.8
お母さん	69.7	70.1	70.0
お父さんのときも、お母さんのときもある	15.9	14.7	15.3
おじいさん、おばあさんなど	2.1	2.8	2.4
もらっていない	3.0	2.0	2.5

（表７）こづかいの額×足りているか

└→少し足りない

（%）

	足りない		ちょうどいい	あまっている	
	ぜんぜん	少し		わりと	とても
～999円	27.7	29.8	35.1	2.1	5.3
1000～2499円	15.7	43.6	30.8	9.3	0.6
2500～3999円	16.5	39.6	34.3	8.2	1.4
4000～4999円	15.8	37.7	34.2	10.5	1.8
5000円～	18.9	30.5	34.8	10.5	5.3
全体	15.6	38.5	35.2	8.2	2.5

（表８）いくらもらいたいか

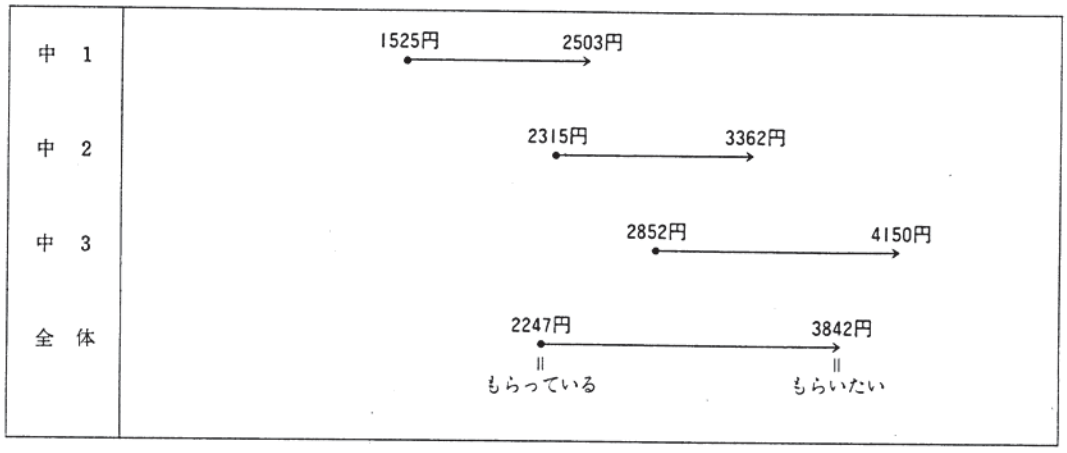
└──→4000円くらいほしい

（%）

		～999円	1000～1499円	1500～1999円	2000～2499円	2500～2999円	3000～3999円	4000円～	平　均
学　年	中　1	1.4	12.0	15.2	20.8	25.0	7.3	18.3	2503円
	中　2	0.8	3.3	4.1	14.9	30.2	9.7	37.0	3362円
	中　3	0.3	0.8	1.9	6.9	23.6	8.0	58.5	4150円
性	男　子	1.0	4.7	5.7	10.3	27.4	8.6	42.3	4125円
	女　子	0.5	4.5	6.5	17.5	26.5	8.4	36.1	3502円
全　体		0.8	4.6	6.1	13.7	27.0	8.5	39.3	3842円

（図２）こづかいの現状と希望

└──→1000～1600円の開き



2．貯金の額

1か月に3,000円ともなるとかなりの金額だし、それに3,000円を1か月かけてつかっていかねばならないから、計画的なつかい方が必要となる。そこで、こづかい帳をつけているかどうか尋ねてみた(**表9**)。「いつもつけている」子は1割程度で、「つけていない」子が4分の3を超える。

おとなでも家計簿やこづかい帳をつけるのはおっくうな感じがする。まして中学生としては、つけないのも当然のように思えるが、つけている子の中では「つけていると便利だから」という声が多い(**表10**)。

子どもたちが金銭を手にするのは、こづかいの他にお年玉の機会であろう。何人かから合計して何万円かをもらい、ラジカセやトレーナー、バッグなどの好みの物を求める。そして、残りを貯金にまわす。

そうした貯金の額を集計してみると、平均して69,000円となる(**表11**)。**図3**に示したように小学生の場合、12～14万円程度を貯金していた。しかし中学生になると、貯金額が半減している。中学生になるときに貯金をおろして何かの記念品を求めたか、それとも中学生になってから、金銭をつかう機会がふえて、貯金をなしくずしにつかっているのであろうか。

もっとも**表12**によると、「貯金をおろしたこと」の多い子は少数派で、「おろしたことがない」子が46%と半数に近い。したがって貯金額の半減は、小学校卒業時に貯金をおろして、何かの記念になるものを求めたとでも解釈するほうが納得できるように思う。

(表9) こづかい帳をつけているか

→ 4分の3がつけていない

(%)

		つけている	つけたりつけなかったり	つけていない
学年	中1	16.6	16.6	66.8
	中2	10.6	11.2	78.2
	中3	7.0	9.5	83.5
性	男子	7.9	8.0	84.1
	女子	14.0	16.2	69.8
全体		10.9	12.0	77.1

なお、貯金をする理由については「貯金がふえるのが楽しみ」という子が43%を占める(表13)。無駄づかいをするよりも、貯金をするタイプのほうが好ましいのはたしかであろう。とはいうものの中学生のうちから、貯金の額がふえるのが楽しみというのも、夢がなさすぎる気持ちがする。

(表10) こづかい帳をつける理由

└→ つけると便利だから

(%)

	性		全体
	男子	女子	
家の人がつけなさいとうるさく言うから	29.4	19.5	23.2
こづかい帳をつけていると便利だから	41.7	52.0	48.1
お金を大切につかいたいから	26.4	27.1	26.8
学校で先生につけるように言われたから	2.5	1.4	1.9

(表11) 貯金の額

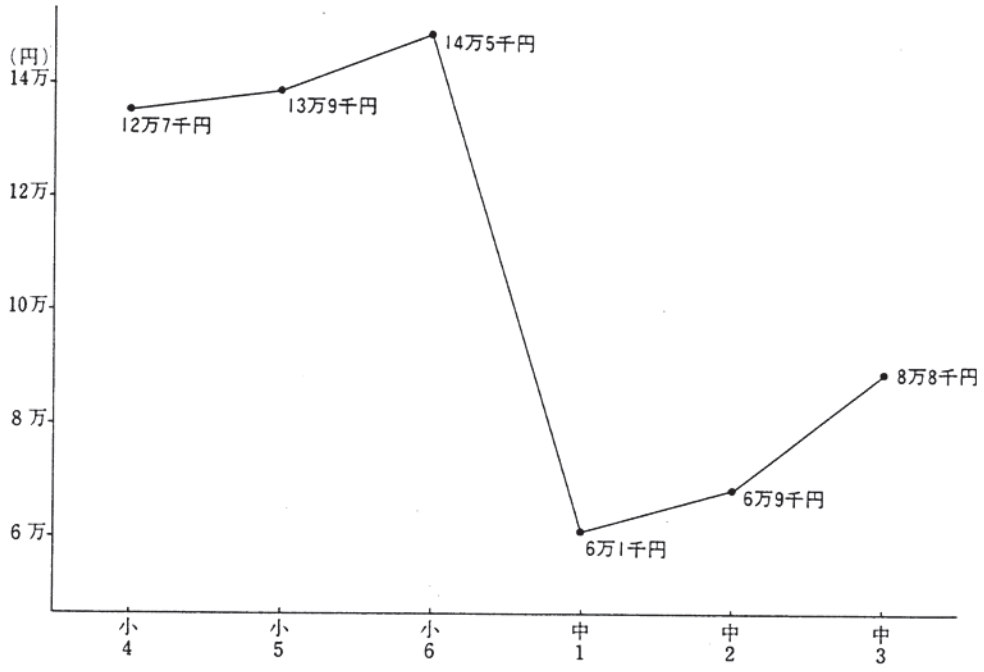
└→ 7万円くらい

(%)

		3万円未満	3万～6万円未満	6万～9万円未満	9万～12万円未満	12万円以上	平均
学年	中1	23.6	24.5	13.6	17.6	20.7	61020円
	中2	26.0	25.9	10.6	14.1	23.4	68780円
	中3	27.1	17.3	9.9	19.6	26.1	88070円
性	男子	26.1	19.2	10.7	17.4	26.6	80320円
	女子	25.1	27.0	12.0	16.0	19.9	53254円
全体		25.6	22.9	11.3	16.7	23.5	69020円

（図３）貯金の額×学年

→中３は９万円弱



（表12）貯金をおろしたこと

→あまりない

（%）

		よくおろしてつかう	ときどきおろす	1度か2度ある	おろしたことがない
学年	中1	2.4	16.0	31.0	50.6
	中2	3.7	18.8	31.1	46.4
	中3	6.2	19.8	31.9	42.1
性	男子	4.4	19.6	30.7	45.3
	女子	3.9	17.3	31.9	46.9
全体		4.1	18.5	31.3	46.1

（表13）貯金をする理由
└──→貯金は楽しみ

(%)

こづかいがあまったから	18.5
特に買いたい物はないが、貯金がふえるのが楽しみだから	42.7
買いたい物があるから	17.5
全部つかってしまいたいが、家の人が貯金しなさいと言うので	21.3

3．カードや通信販売

現代はキャッシュレスの時代だといわれる。特にアメリカを旅していると、スーパーや書店といった日常生活のこまごまとした買い物についても、カードをつかう生活を見聞する。ホテルでもステイタスを保証するカードを示すと、応対が変わったりすることがある。

日本ではカード時代といっても、中学生の場合それほどの影響を持つとは思えないが、それでもレコード店やディスカウントショップ、美容室などで若者向けのカードを発行しているから、中高校生たちも、カードを持っているのではと思った。

実際にも**表14**のように、中学生の4割がカードを持っているのがわかる。レコード店や美容室の場合、カードというより会員証の感じを受けるが、中学生たちがそうしたカード化の渦に巻きこまれているのが注目をひく。

かつて「セールスマンの死」がヒットしたことがあった。アメリカではカードとクレジットの生活が始まっており、誘惑に負けてつい多額のローンをかかえてしまう。そうしたこわさを教えてくれたドラマだが、その頃の日本ではピンとくるものがなく、アメリカでのこわい話という感じで、ストーリーを追っていた思い出がある。

しかし、日本でもそろそろ「セールスマンの死」が他人ごとに思えない時代を迎えている。中学生たちはカードをうまくつかいきっているのであろうか。

カードとともに、通信販売も現代を象徴するものだが、トレーナーや文房具、下着など、中高校生を対象とした通信販売のカタログを見かける。中には、ツッパリの生徒向けに異装の制服を販売しているカタログもある。

さすがに6割の子は「利用したことがない」と答えており、「知らない」も13%に達する。したがって4分の3の生徒は通信販売と無縁の生活を送っているが(**表16**)、それでも少数ながら何回も利用している生徒もおり、彼らは文房具やストッキングなどを求めている(**表17**)。

全体としてみると、多くの生徒たちはカードや通信販売におぼれこむことなしに、節度を持ってこづかいの範囲内で金銭をつかっており、予想している以上に金銭について、健全な感覚を持っているように思えた。

（表14）カード

→ 4割が持っている

（%）

		持っている
学　年	中　1	58.2
	中　2	39.5
	中　3	35.9
性	男　子	45.9
	女　子	39.5
全　体		42.8

（表15）カードの種類

→キャッシュカードを持つ子も

（%）

銀行のキャッシュカード	12.0
クレジットカード	1.3
デパートなどのカード	3.5
その他	30.5

（生徒全体を100%として。ただし、カードを持っている者は42.8%。）

(表16) 通信販売

└→あまり利用していない

(%)

		よく利用する	今までに5～6回ある	今までに1～2回ある	利用したことがない	通信販売を知らない
学年	中1	1.6	2.5	14.9	59.2	21.8
	中2	3.0	3.6	20.8	59.5	13.1
	中3	2.8	4.9	25.4	62.0	4.9
性	男子	2.5	3.0	18.2	64.5	11.8
	女子	2.7	4.5	23.6	55.8	13.4
全体		2.6	3.7	20.8	60.3	12.6

(表17) 通信販売を利用して買ったもの

└→それなりの利用法

(%)

学生服、上衣	0.9
ズボン	1.1
ワイシャツ	1.0
ブラウス	1.3
下着など	4.6
靴下（ストッキング）	4.7
ベルト	0.5
文房具	5.5
Tシャツ	1.8

（生徒全体を100%として。ただし、利用した者は27.1%。）

第II章 金銭感覚をめぐって

1．アルバイトの体験

特集でふれたように、現代の子どもたちは消費者として成長してくる。つまり、金銭をかせいだことなしに、金銭のつかい手として毎日を暮らしている。

それでは子どもたちは何を買っているのであろうか。図4のように、マンガ雑誌と友だちにおごる、レコードやカセットが3位までを占める。中学生の生活を反映しており、いかにもその通りという感じがする。

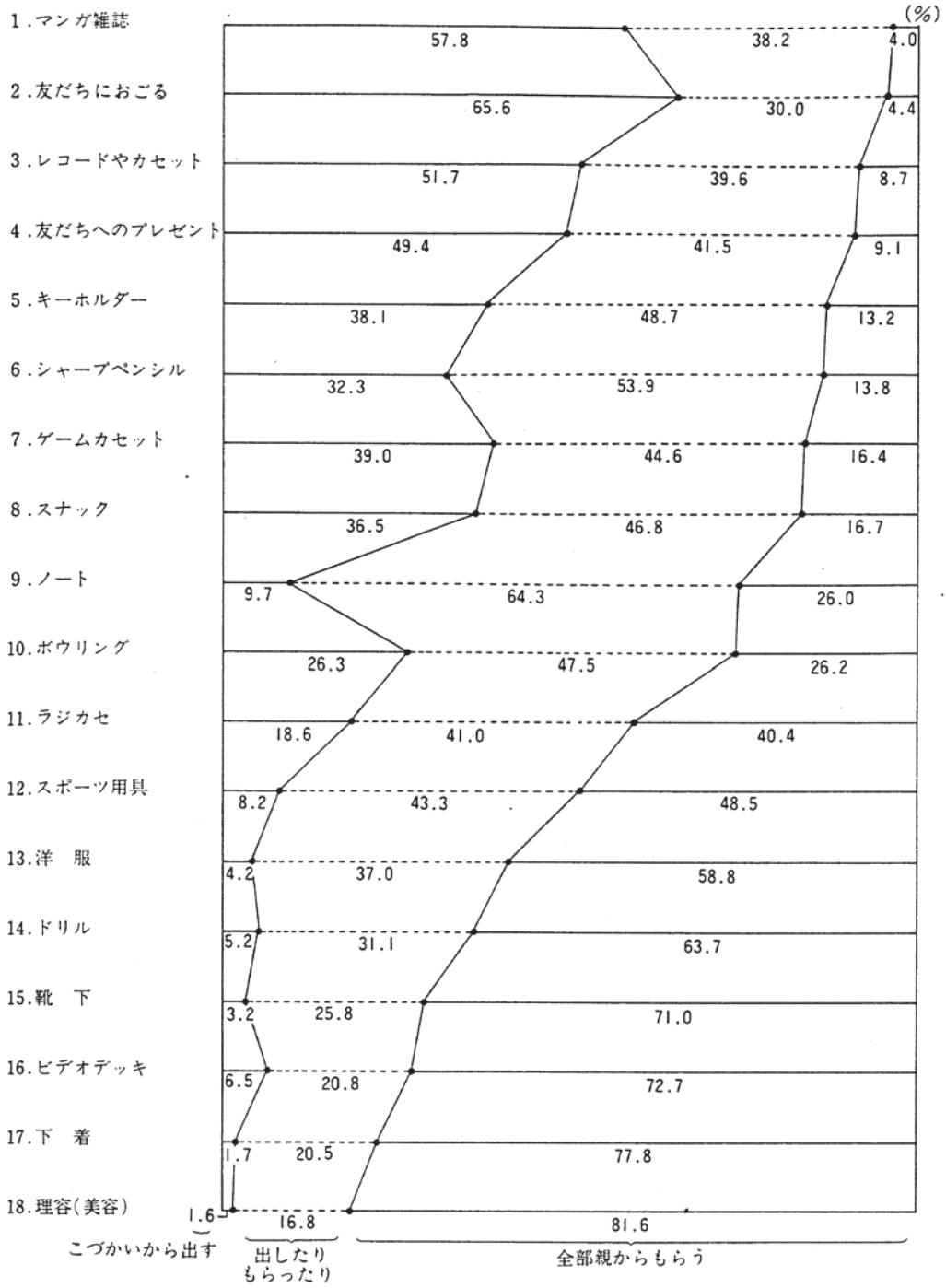
いずれにせよ、子どもたちが金銭をつかっているのはたしかだが、働いた体験は乏しかろう。そこで、まず手伝ってお金をもらったことの有無を尋ねると、そうした体験を持つ子は多い(表18)。

もっとも手伝いのごほうびは、いわば身内の金銭のやりとりで、働くというカテゴリーには入らない気持ちもする。そこでアルバイトをした体験を尋ねると、図5が示すように、中1の11%から中2の13%、中3の17%と、学年が上がるにつれてアルバイトをした子の割合が増す。もっとも中3でも、アルバイトをした子は2割弱なので、5人のうち1人という割合となる。

もっとも学校では一般的に、生徒のアルバイトを禁止している。それにしては、表18の数値は予想よりも多いように思える。学校の目をくぐって、子どもたちは働いているのであろうか。

（図４）こづかいで求めるもの

└──→マンガ雑誌と友だちにおごる



（表18）手伝いをしてお金をもらったこと

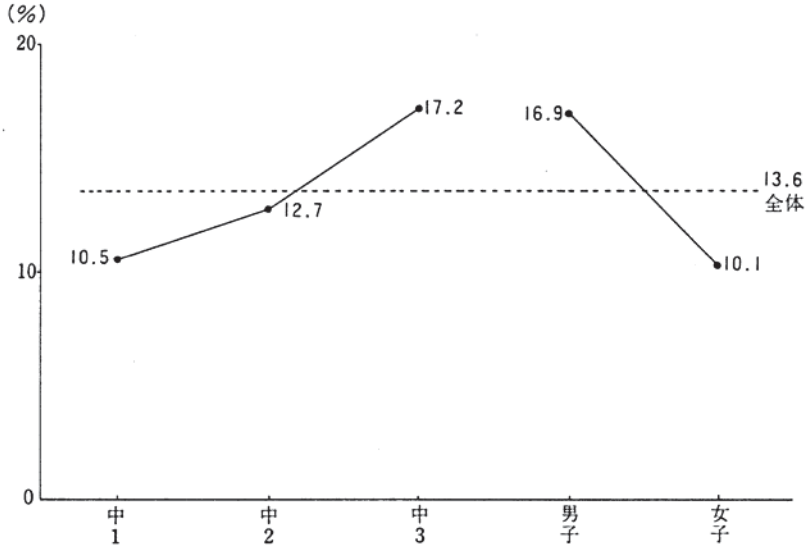
→ときどきある

（%）

	1回もない	1回か2回ある	ときどきある	しょっちゅうある
家の手伝いをしたとき	18.3	23.0	47.6	11.1
成績が上がったとき	56.6	19.8	17.2	6.4

（図5）アルバイトをしたことがある割合

→中3は2割弱



2．アルバイトの時給

キヨスクをのぞいていると、週刊誌の他にさまざまな情報誌が並んでいるのに気づく。アパートやマンションなどの住宅関係の情報誌の他に、アルバイトやパートタイマーなどを専門とした週刊情報誌もあり、かなりの売り上げを示している。

もちろん生徒たちが、そうした雑誌を見る機会は少ないであろうが、それでも新聞の広告などを見ていれば、パートの時給がいくらくらいかはわかる。

そこで「スーパーのレジ」や「ファーストフードショップのカウンター」のように職

（表19）アルバイトをしたら
└──→時給500円

（%）

		1時間働いて							平均
		200円以下	300円	400円	500円	600円	700～800円	1000円以上	
もらえるか	ファーストフードショップのカウンターで働く	3.3	10.1	13.7	32.4	22.1	12.9	5.5	515円
	郵便局などでハガキをよりわける	4.4	9.9	14.6	24.7	19.2	17.2	10.0	530円
	お菓子屋や文具店で店を手伝う	10.4	16.4	25.7	29.4	10.3	4.5	3.3	482円
	スーパーマーケットのレジをする	2.6	7.2	13.4	25.9	24.6	17.3	9.0	583円

		1時間働いて					平均
		300円くらいでよい	500円くらい	700～800円くらい	1000円くらい	2000円以上	
もらいたいか	ファーストフードショップのカウンターで働く	5.3	25.6	38.3	16.3	14.5	755円
	郵便局などでハガキをよりわける	6.8	25.7	32.6	19.4	15.5	713円
	お菓子屋や文具店で店を手伝う	11.8	36.5	28.1	11.1	12.5	588円
	スーパーマーケットのレジをする	3.5	18.7	38.9	20.7	18.2	740円

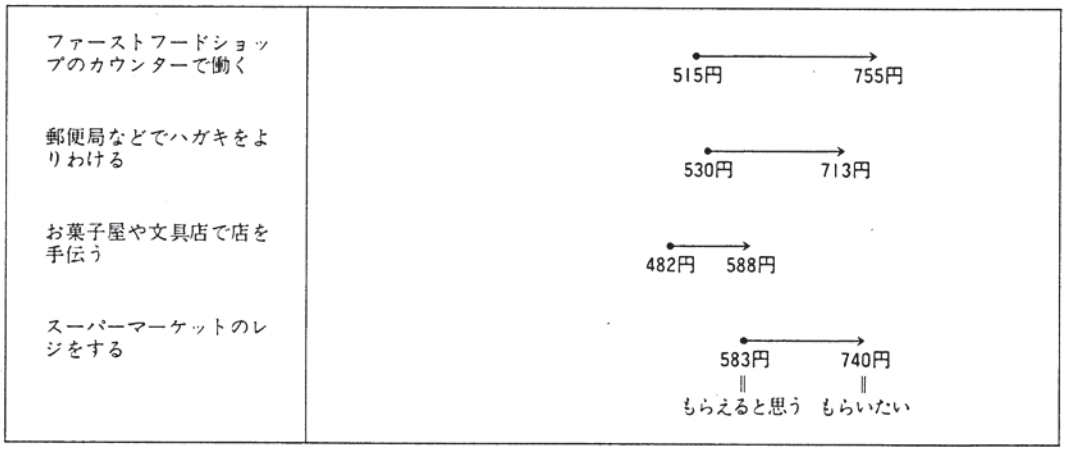
種を提示して、そこで働くと時給がいくらになるか、そして、いくらほしいかを尋ねてみた(**表19**)。職種により多少のちらばりが認められるが、子どもたちは働くようになれば、時給500円は手にできると思っている。仮に1日に4時間働くとして、1日に2,000円、月あたりに換算して、60,000円の収入となる。

ハンバーガーショップの店頭などに、時給500～700円の求人広告が貼ってあることが多いから、生徒たちの時給500円は、おおむね妥当な金額なのかもしれない。もっとも子どもたちは、時給500円では少なめで、本当は700円くらいほしいと思っており、現実の時給との間に200円前後のずれが認められる(**図6**)。

もっとも時給700円ならばフルタイムの場合、1日は5,600円、1か月に25日働いたとして、14万円が収入となる。中学生としては、時給700円は少し高望みという感じがする。

(図6) いくらもらえるか、もらいたいか(平均値)

└──→200円の開き



3．お金の貸し借り

大半の子どもたちは、金銭のつかい手として成長しているのはくり返し述べた通りだが、そうした生徒たちは金銭について、どの程度の感覚を持っているのであろうか。

「友だちにお金を貸して返してくれないとき、いくらくらいならがまんをしているか」についての反応を**表20**に示した。「どんなに少なくても返してもらう」が25%、「300円以上でもかまわない」が21%と、子どもたちの反応にちらばりが認められる。しかし全体としてみると、「だまっている額」のボーダーラインが100円なのがわかる。10円や50円ならだまっているが、100円単位になると、返してほしいと思うのであろう。

なお、金銭の貸し借りについての感覚を**表21**に示した。500円くらいなら貸してもよいと思っている子が多いが、借りるときは100円くらいがよいという。貸すのは多くても、借りるのは少なくしたいというのであろう。

(表20) 返してもらうのを「だまっている」額

└──→100円くらいならがまんしてもよい

(%)

		どんなに少なくても返してもらう	10円くらいならいい	50円くらいならいい	100円くらいならいい	300円くらいならいい	500円くらいならいい	1000円以上でもいい
学年	中1	34.3	17.9	13.4	24.6	6.7	2.2	0.9
	中2	24.5	12.3	10.8	29.6	13.8	7.2	1.8
	中3	19.9	12.9	11.2	30.0	14.8	9.2	2.0
性	男子	30.9	12.2	9.7	26.0	11.0	7.7	2.5
	女子	19.6	15.4	13.4	31.3	14.0	5.5	0.8
こづかいの額	～1499円	44.4	17.0	8.5	19.8	7.5	1.4	1.4
	1500～2499円	31.7	13.9	14.5	27.7	10.0	1.6	0.6
	2500～3999円	17.8	11.7	11.1	33.5	15.4	9.2	1.3
	4000円～	16.8	5.3	14.2	32.8	15.9	10.6	4.4
全体		25.4	13.8	11.5	28.6	12.4	6.6	1.7

（表21）お金の貸し借り

└──→多くても500円まで

(%)

			たとえいくらでも貸す(借りる)のはよくない	50円くらいならいい	100円くらいならいい	500円くらいならいい	1000円くらいならいい	2000円以上でもいい
貸す	学年	中1	19.4	11.8	(37.9)	23.7	5.8	1.4
		中2	11.6	4.9	29.7	(35.1)	14.4	4.3
		中3	4.7	2.5	23.9	(38.1)	24.0	6.8
	性	男子	13.9	6.0	(30.1)	27.1	16.5	6.4
		女子	8.6	5.6	29.5	(40.0)	14.0	2.3
	全体		11.3	5.8	29.9	(33.3)	15.3	4.4
借りる	学年	中1	34.0	10.5	(35.4)	16.1	1.4	2.6
		中2	25.1	5.1	(32.5)	26.2	8.2	2.9
		中3	13.6	3.3	29.3	(33.9)	14.8	5.1
	性	男子	24.5	4.6	(29.4)	24.4	11.3	5.8
		女子	22.8	7.0	(35.5)	27.8	5.8	1.1
	全体		23.7	5.8	(32.3)	26.1	8.6	3.5

◯＝最大値

4．お金の重み

中学生にとって100円が、金銭としてこだわる単位になるのがわかったが、そうした問題を別の角度から尋ねたのが、**表22**である。

お金が落ちていたときに5円玉だとそのままにしておく。そして10円玉からは拾う。そして、自分のものにする。しかし、1,000円札だとどうしようかと思い、5,000円以上は警察に届けるというのが、子どもたちの平均的な反応となる。

念のために小学生の反応と対比させてみると、**図7**の通り、小学生は5円でも届けるつもりの子が多い。しかし中学生となると、そうした小さなお金は放っておくか、自分のものにするかの割合が高い。

（表22）お金の意味

→10円玉からお金扱い

(%)

	そのままにしておく	拾って自分のものにする	拾って家の人にあずける	拾って交番に届ける
1円玉	61.6	27.3	6.1	5.0
5円玉	55.9	32.1	7.0	5.0
10円玉	34.2	52.0	7.2	6.6
50円玉	12.1	71.3	8.4	8.2
100円玉	5.7	74.7	8.5	11.1
500円玉	2.2	64.4	11.9	21.5
1000円札	1.1	47.6	11.7	39.6
5000円札	0.9	33.1	10.1	55.9
1万円札	1.0	29.6	7.7	61.7

◯＝最大値

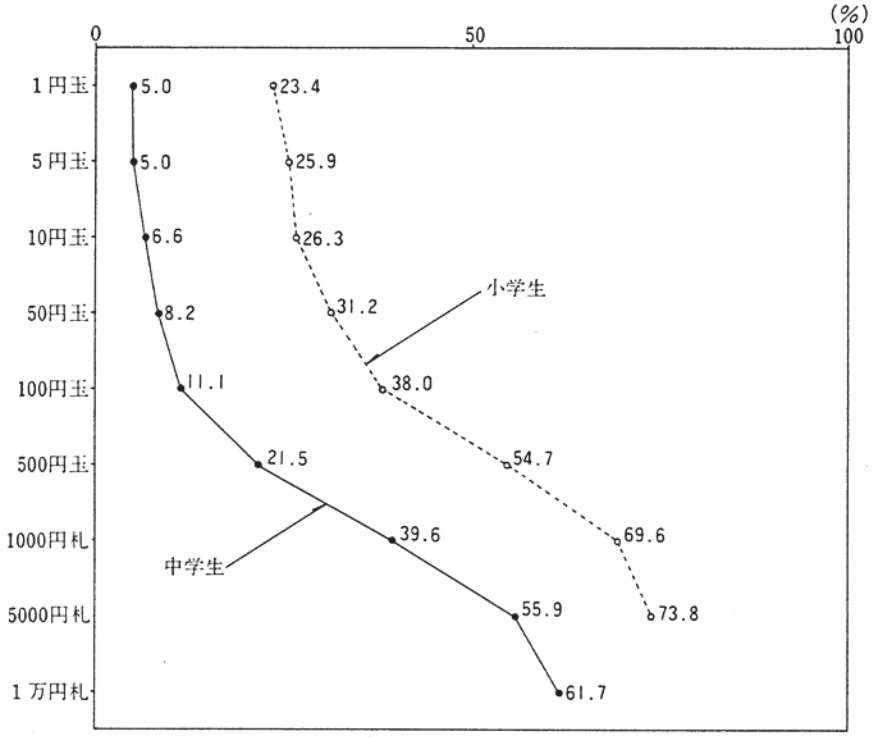
こうした感覚の変化は、子どもたちの金銭感覚がこづかいの額がふえてくるのにしたがって、成長してきたといってよいのであろうか。

念のために子どもたちに、「大金」とはいくらのことなのかをオープンアンサーの形で尋ねてみた。**表23**に示すように、2,000～3,000円を大金と思う子はほんの数%にすぎない。そして、7割近い子どもたちは10,000円以上を大金と答えている。10,000円を超えると、なんでもほしい物がそれで手に入るから、たしかに大金なのであろう。

したがってカセットテープのように、1,000円単位の物については、すぐに買うのではなく、ちょっと考えてから購入しているという(**表24**)。

こう見てくると、100円玉くらいから金銭としてこだわりを持ち、1,000円くらいになると、自分のものにするか、それとも警察に届けるかをかなり考える。そして、10,000円からが大金というのが、中学生の平均的な金銭感覚のように思われる。

(図7) 警察に届ける割合



（表23）大金とは

→ 1万円からが大金

（%）

		1000円	2000円	3000円	4000円	5000円	10000円	15000円	20000円以上	平均
学年	中 1	8.9	4.7	4.9	2.6	19.4	27.2	7.3	25.0	11000円
	中 2	6.6	1.6	4.1	2.8	14.1	29.3	9.2	32.3	14000円
	中 3	6.8	1.2	4.2	1.6	15.6	30.3	8.1	32.2	14000円
性	男子	9.2	1.8	4.3	2.1	14.6	25.9	7.6	34.5	13000円
	女子	5.2	2.6	4.4	2.6	17.1	32.5	9.4	26.2	12000円
こづかいの額	～1499円	8.1	4.2	3.9	2.6	17.7	28.4	8.3	26.8	12000円
	1500～2499円	8.1	3.3	7.8	2.9	18.9	27.4	7.5	24.1	12000円
	2500～3999円	4.2	1.2	2.9	2.6	14.6	30.8	9.8	33.9	14000円
	4000円～	4.2	1.1	2.1	0.6	7.1	29.2	11.5	44.2	18000円
全体		7.2	2.2	4.3	2.4	15.8	29.1	8.5	30.5	13000円

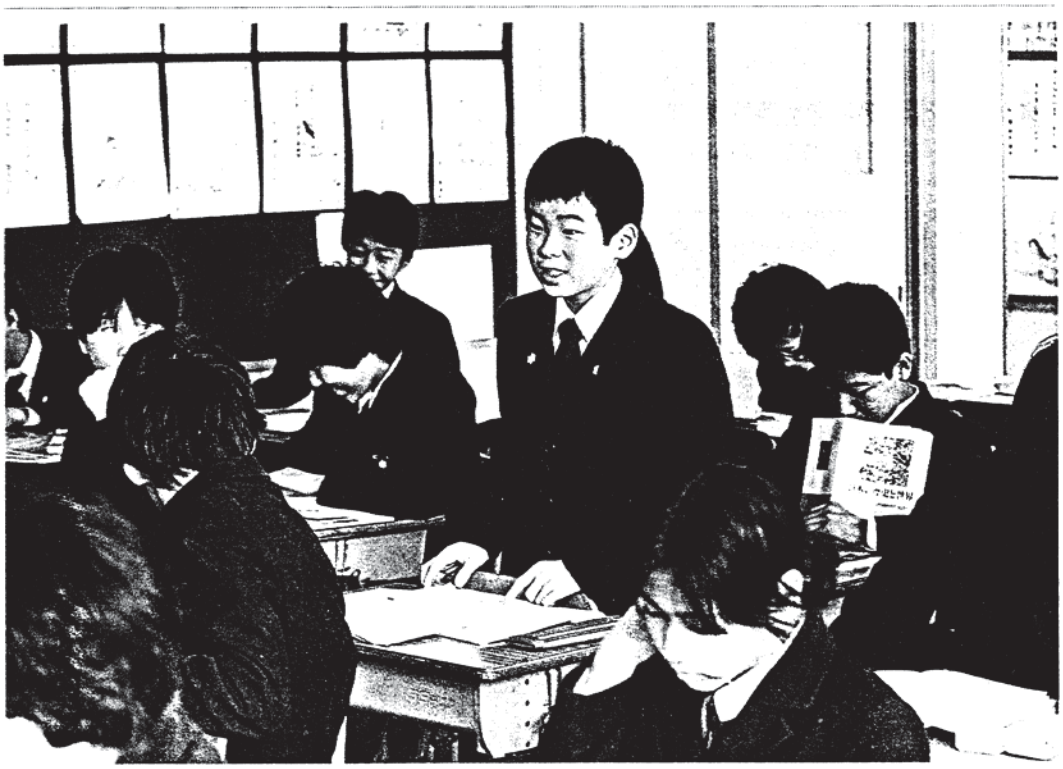
◯＝最大値

（表24）ほしいカセットテープの求め方

（%）

		ほしい物をすぐに買う	ちょっとがまんする	かなりがまんする	できるだけ買わないようにする
学年	中 1	18.0	47.6	13.8	20.6
		∧			∨
	中 2	21.9	48.5	12.2	17.4
		∧			∨
	中 3	27.7	50.5	10.7	11.1
性	男子	20.6	45.5	13.9	20.0
	女子	24.9	52.5	10.3	12.3
こづかいの額	～1999円	15.6	45.4	15.6	23.4
		∧			
	2000～2499円	18.2	45.5	13.2	23.1
		∧			
	2500～2999円	21.8	51.0	13.7	13.5
		∧			
	3000円～	26.3	50.3	12.4	11.0
全体		22.7	48.9	12.1	16.3

第III章 経済生活の見通し



1．1か月の生活費

こうした中学生たちの金銭感覚は考え方にもよろうが、思っているより堅実でしっかりとしていた。そして金銭について、きちんとした評価を持っている印象を受けた。

そこであらためて、もう少し大きな対象についての子どもたちの金銭観を尋ねてみることにした。まず中学生たちは、ほどなく高校受験を迎える。そこで中3の生徒に高校受験にいくらかかると思うかと聞いてみると、**表25**のような結果が得られる。あれやこれやを合算すると、20万円くらいはかかると思っている子が多い。もちろん公立か私立か、私立を何校受験するかによって数値は異なってこようが、少なくとも高校受験が決して安いものでないことを子どもたちも十分に知っているように思える。

それでは、子どもたちは自分の家の暮らしぶりをどう感じているのであろうか。64%と過半数を超える子が、自分の家庭は「ふつうくらい」の暮らしだと答えている(**表26**)。

日本は、中流意識を持つ人が多い社会だといわれる。さまざまな世論調査の結果でも、中流と思う家庭が9割を超える。そうだとすれば、生徒たちの反応も当然の帰結のように思われよう。

そうしたとき、中流の暮らしというのは1か月あたりどれくらいの生活費で送るものなのであろうか。**表27**のように、子どもたちはわ

が家の生活費は25万円くらいだと答えている。

ローンの返済や父親のこづかいなどを加えると、中学生を持つ家庭の場合、生活費がもう少しかかっているのではと思うが、25万円という数値も、それほど的外れではないような印象を受ける。子どもたちは、親の生活ぶりをきちんと観察しているのであろうか。

(表25) 高校進学にかかる費用(中3)

→20万円くらい

(%)

		10万円未満	10万～20万円未満	20万～40万円未満	40万～100万円未満	100万円以上	平　均
性	男　子	25.2	20.8	15.2	14.2	24.6	18.6万円
	女　子	16.7	18.2	18.2	24.7	22.2	26.8万円
全　体		21.3	19.5	16.6	19.1	23.5	23.4万円

(表26) 家は豊かなほうか

→ふつうくらい

(%)

		豊　か		ふつうくらい	豊かでない	
		とても	わりと		あまり	ぜんぜん
学　年	中　1	2.4	13.6	67.1	10.0	6.9
	中　2	3.0	11.1	61.3	16.7	7.9
	中　3	1.8	10.7	63.9	15.4	8.2
性	男　子	3.5	12.3	61.7	13.9	8.6
	女　子	1.5	10.7	65.6	15.5	6.7
全　体		2.5	11.5	63.6	14.7	7.7

（表27）家庭の生活費

→25万円くらい

（%）

		～9.9万円	10万～19.9万円	20万～29.9万円	30万～39.9万円	40万円～	平　均
学　年	中　1	18.7	26.4	24.8	17.7	12.4	23.2万円
	中　2	19.1	23.0	24.4	18.4	15.1	25.4万円
	中　3	12.8	23.6	27.5	19.3	16.8	28.3万円
性	男　子	17.4	22.7	26.7	17.2	16.0	24.6万円
	女　子	16.7	25.5	24.2	19.9	13.7	25.2万円
全　体		17.1	24.0	25.5	18.5	14.9	24.9万円

2．収入の見通し

中学生は、やがて社会へ出て仕事を持つようになる。そうしたときはじめて、子どもたちは金銭の意味がわかるようになるのであろうか。子どもたちは、将来の収入の見通しを**表28**のように答えている。

ここでは、20歳、25歳、30歳、40歳の4時点をとり、それぞれの年齢の折り、「少なくてもいくらほしいか」「ふつうならいくらくらいほしいか」、そして「うまくいけばいくらくらい手にできそうか」を尋ねる形式をとった。

図8に掲げたように、20歳のときに17万円くらい、25歳で23万円、30歳で35万円が、「ふつうにやれば」手にできる金額だという。

20代はともかく、30代に入ってからの収入期待が高すぎるような気もするが、中学生にとって30歳はずっと先のことで、その頃になれば35万円くらいはとれるだろうとぼんやり考えているのであろう。

なお、将来の進路と収入との関係を分析してみた(**表29**)。高卒でつとめるつもりの子どもより、大学志望者のほうが収入の多い生活を予想し、特にむずかしい大学を目指す子の中に高い収入のある暮らしを見込んでいる子が多い。

むずかしい大学へ入学できれば望みの仕事につける、そうなれば多くの収入を期待できるという反応なのであろう。

(表28) 収入の見通し

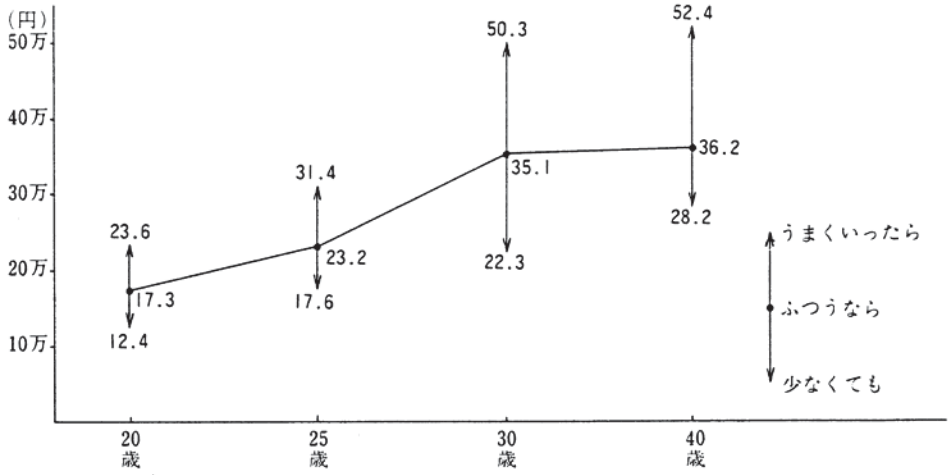
→30歳で35万円

(円)

	少なくても	ふつうなら	うまくいったら
20歳で働いたら	12.4万	17.3万	23.6万
25歳の頃	17.6万	23.2万	31.4万
30歳の頃	22.3万	35.1万	50.3万
40歳の頃	28.2万	36.2万	52.4万

（図８）収入の見通し

→20歳で20万円



（表29）25歳の頃×進路

→むずかしい大学志望者は収入も高く見込む

(%)

	少なくても			ふつうなら				うまくいったら		
	20～24万円	25万円～	小計	20～24万円	25～29万円	30万円～	小計	30～34万円	35万円～	小計
高校	21.3	16.3	37.6	19.6	17.1	25.1	61.8	14.7	36.9	51.6
短大・専門	20.3	15.5	35.8	22.5	14.2	22.7	59.4	15.1	29.9	45.0
まあまあの大学	24.0	17.3	41.3	25.7	19.0	23.9	68.6	17.5	36.3	53.8
むずかしい大学	22.8	25.7	48.5	22.8	16.7	34.1	73.6	14.3	47.6	61.9
全体	21.8	17.7	39.5	22.8	16.7	25.0	64.5	15.7	36.3	52.0

3．将来の見通し

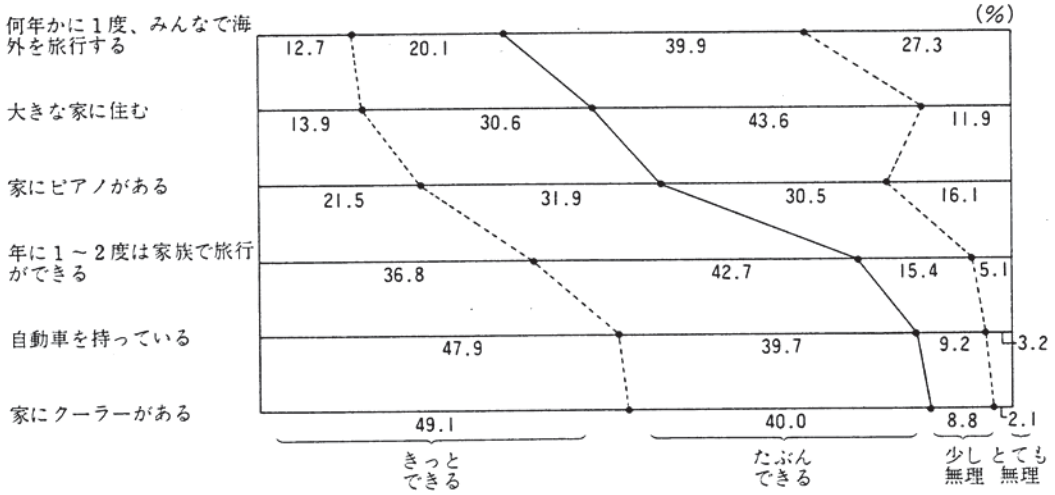
そうした金銭面への期待より幅を広げて、将来どういう生活を送れそうかを尋ねた結果が**図9**である。大きな家に住むのは無理かもしれないが、クーラーがあり、自動車を持っている程度の豊かな暮らしは可能だろうという。

この設問は小学生に対してもきいているので、将来の見通しについて、中学生の反応を小学生と対比させてみると、**図10**のようなプロフィールとなる。子どもの調査を行っていると、小学生から中学生になるにつれて、見通しの暗くなる場合が少なくない。しかし図10については、中学生たちも小学生とほぼ同じように、豊かな生活ができると予想している。換言するなら、子どもたちにとって、クーラーがあり、自動車のある暮らしは自明なのであって、そうしたことが可能かと問われるほうがむしろ疑問なのかもしれない。

そうした中で、将来の見通しを進路と関係させて調べてみると、むずかしい大学への進学を考えている生徒が、将来の達成に明るい感じを抱いている(**表30**)。すでに表29でふれたように、成績のよさが金銭的な豊かさを保証すると、子どもたちは考えていた。それと同じ論理で、社会的な達成が可能だと思っているのであろう。なお、現在こづかいをどの程度もらっているのかと将来の見通しとの関係は見いだせなかった。今が豊かだからといって自分が家庭を作ったとき、将来もそうなるとは限らないのであるから、この反応はある意味では良識をふまえているといえよう。

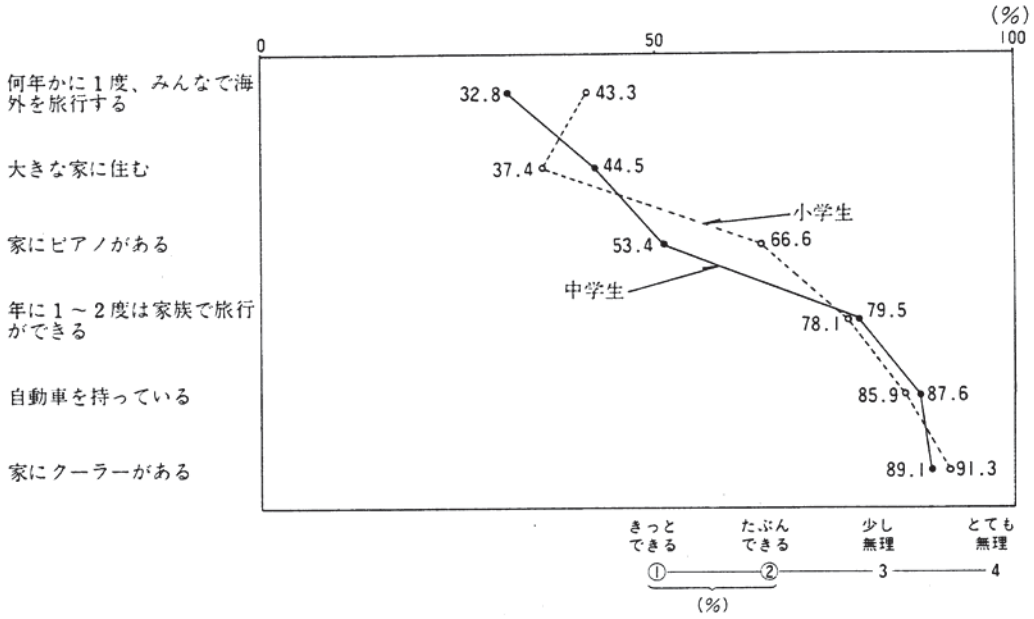
(図9) 将来の見通し

→広い家は無理かも



(図10) 将来の見通し(小学生との対比)

└──→同じような見通し



(表30) 将来の見通し×進路・こづかいの額

(%)

	進路				こづかいの額			
	高校	短大・専門	まあまあの大学	むずかしい大学	1500円未満	1500～2000円未満	2000～2500円未満	2500円以上
自動車を持っている	40.9 <	41.3 <	52.4 <	(66.4)	47.0	51.1	43.9	47.8
家にクーラーがある	48.0	46.2	46.5 <	(63.8)	33.8 <	41.8 <	48.2 <	(59.1)
家にピアノがある	12.8	24.7	18.9 <	(36.8)	22.3	20.4	21.0	20.6
年に1～2度は家族で旅行ができる	28.4	36.8	36.2 <	(55.1)	35.5	33.1	33.4	38.7
大きな家に住む	10.0	12.2	11.8 <	(29.7)	13.9	12.2	12.9	13.1
何年かに1度、みんなで海外を旅行する	11.1	9.5	11.2 <	(25.4)	11.3	9.8	11.5	11.9

きっとできる ① ── 2 ── 3 ── 4 とても無理
たぶんできる　少し無理
(%)

4．お金のしつけ

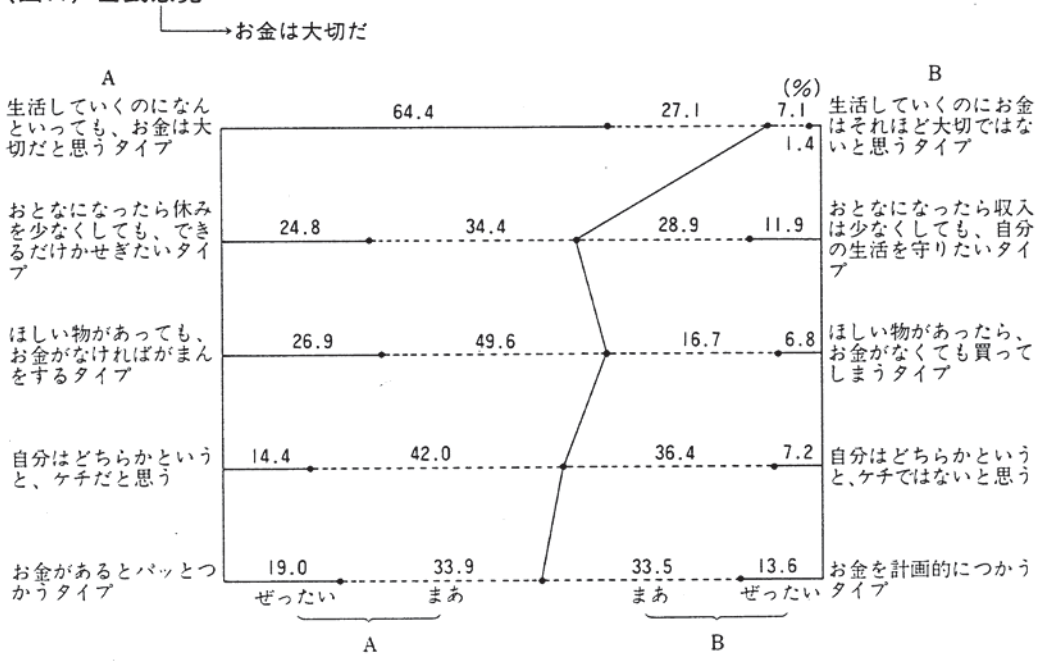
これまでふれてきたように、金銭についての子どもたちの感覚は、働いて金銭を得た体験に乏しいからやむをえないとはいえ、金銭のあるのを当然と思う甘さを伴っていた。しかし、そうした範囲内であるにせよ、それなりにしっかりとした金銭観を持っており、金銭の大事さを理解しているようであった。

そこであらためて、金銭についての感覚を子どもたちに尋ねると、**図11**のような結果が得られる。「お金は大切だと思う」「おとなになったら、できるだけかせぎたい」などが過半数を超える。子どもたちも遊んでいて楽な暮らしができるとは思っていないようで、金銭感覚がそれほど崩れていない印象を受ける。なお、属性別に調べてみると、男子より女子のほうに金銭面で堅実な考えを持つ子が多いように思う(**表31**)。

子どもたちがそれなりにけじめをつけた感じで、金銭とつき合っているせいか、親たちは金銭面でのしつけをきびしく行っていないような印象を受ける。**図12**によれば、「自分の持ち物を大切にする」や「高い物を買うときは親にことわって」など、親として当然のしつけを除くと、ほどほどのしつけを行うにとどまっている。

なお、金銭面でのしつけは学年別に見ると、中1のほうが行われている割合が多い(**表32**)。小学生の高学年から中学生にかけて、きちんとしつけておけば、中学生になってあらためて金銭のしつけを行わなくともよいというのであろう。

(図11) 金銭感覚



(表31) 金銭感覚×学年・性

└──→中1のほうが大事に

(%)

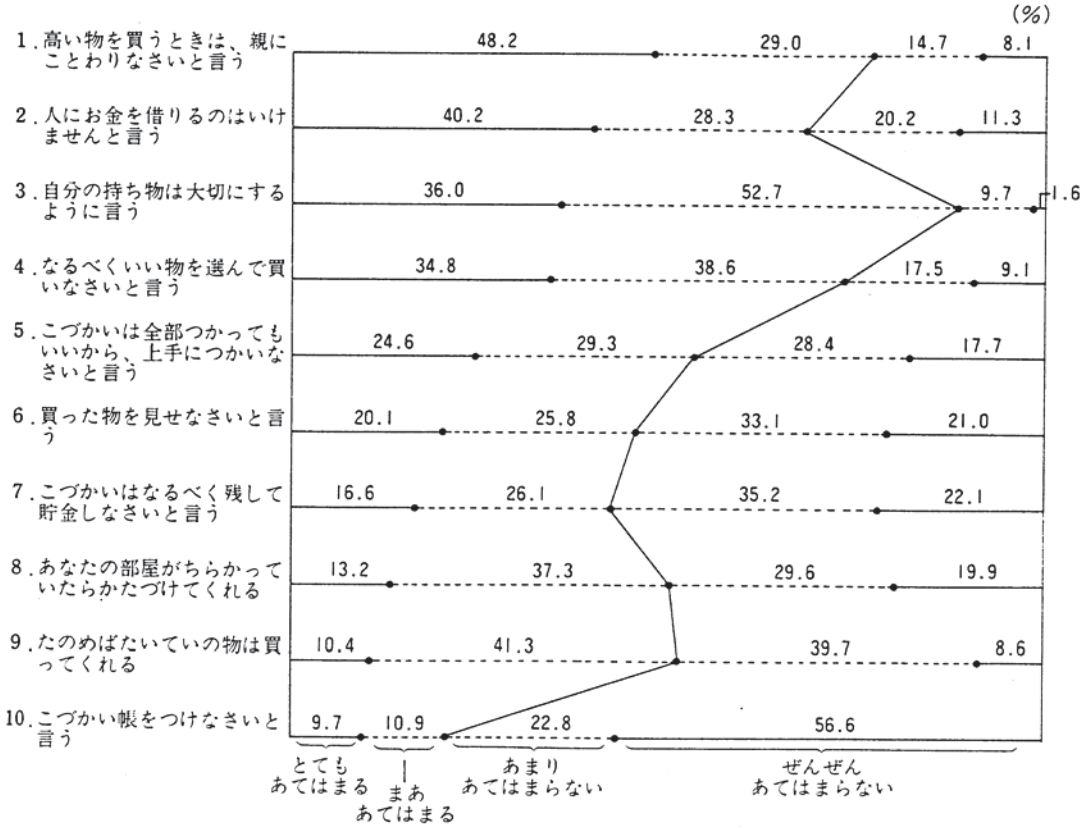
A	学年			性		B
	中 1	中 2	中 3	男 子	女 子	
生活していくのになんといっても、お金は大切だと思うタイプ	65.0	63.0	65.8	63.9	64.9	生活していくのにお金はそれほど大切ではないと思うタイプ
おとなになったら休みを少なくしても、できるだけかせぎたいタイプ	29.1	23.2	23.9	29.3	19.8	おとなになったら収入は少なくしても、自分の生活を守りたいタイプ
ほしい物があっても、お金がなければがまんをするタイプ	29.4	26.2	26.1	28.3	25.3	ほしい物があったら、お金がなくても買ってしまうタイプ
自分はどちらかというと、ケチだと思う	18.7	12.7	13.8	15.8	13.0	自分はどちらかというと、ケチではないと思う
お金があるとパッとつかうタイプ	18.6	19.2	19.1	19.1	18.9	お金を計画的につかうタイプ

ぜったいA ①──まあA 2──まあB 3──ぜったいB 4

(%)

(図12) 金銭のしつけ

└──→持ち物を大切に



(表32) 金銭のしつけ×学年・性

└──→中1のときはしつけ

(%)

	学年			性	
	中 1	中 2	中 3	男 子	女 子
1.高い物を買うときは、親にことわりなさいと言う	56.8	47.9	42.3	50.0	46.1
2.人にお金を借りるのはいけませんと言う	48.4	39.8	34.6	41.3	38.9
3.自分の持ち物は大切にするように言う	42.7	32.4	35.8	37.2	34.6
4.なるべくいい物を選んで買いなさいと言う	38.3	32.3	36.1	35.0	34.6
5.こづかいは全部つかってもいいから、上手につかいなさいと言う	25.6	24.2	24.8	26.2	22.9
6.買った物を見せなさいと言う	24.4	20.2	17.2	21.9	18.2
7.こづかいはなるべく残して貯金しなさいと言う	18.6	16.6	15.3	19.6	13.4
8.あなたの部屋がちらかっていたらかたづけてくれる	16.9	12.9	10.9	17.3	8.9
9.たのめばたいていの物は買ってくれる	10.2	10.2	11.2	10.1	10.8
10.こづかい帳をつけなさいと言う	12.8	9.6	7.8	10.3	9.1

とても あてはまる ①(%) ── 2 ── まあ あてはまる ── 3 ── あまり あてはまらない ── 4 ── ぜんぜん あてはまらない

まとめに代えて

子どもが働かないですむ社会を築こうという願いは、正しかったように思う。たしかにどの子も、経済的な条件にさまたげられることなく、学校へ通い、そして子どもとしての充実した時を過ごす権利を持っていよう。

そしてしあわせなことに、現代の日本は子どもが働かないですむ状況を迎えた。いわば、長年の悲願が実現したのである。しかし働くことを知らない子どもたちがふえ、金銭感覚が失われ始めている。少なくとも労働と消費とのバランスを欠いたまま、完全な消費者として成長してくる。したがって、金銭をいかにつかうかに関心が集まることはあっても、金銭の重みは理解しにくい。

もちろん現代の経済は、キャッシュレスやカード、ローン、外貨など、現金だけでの流通とは異なる複雑な仕組みの中で動いているから、金銭面でのしつけといっても、それほど単純なものではないのかもしれない。しかしそうであるからなおのこと、金銭面での教育が必要となるのであろう。

それと同時に、基本的には子どもたちが労働を体験せずに成長してくるところに問題の本質が潜んでいるのであるから、家計の足しにではなく、子どもの金銭感覚を育てる意味で、子どもたちに労働を体験させることが必要になる。特集でふれたように、学業成績が一定のレベル以上で、部活動などに熱心に参加しているなどの条件をつけて、子どもたちの就労を認める。そうした一方、雇い主にも生徒たちを就労させるにあたっての取り決めを行う。そうした形で、就労を制度化し、子どもたちに労働の意味を理解させることが、金銭についての教育を行うにあたっての主要な方策となるように考えられる。